

KOBEの本棚

—神ふるさと文庫だより—

第61号 平成21年3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



湊川神社と菊水紋

菊水と神戸

神戸には、菊水山・菊水町など、菊水と名のつく事物がたくさんあります。これらは、湊川神社に祀られている楠木正成の家紋が菊水であることに由来しています。

菊水紋は、流水に菊花をあしらった紋で、中国の菊水長寿伝説から生まれました。唐代に編纂された『藝文類聚』によると、南陽酈県の山上に咲く菊から露がしたり落ち、その露の混ざった川の水を飲む村人は長寿であるとのことでした。

この伝説は、鎌倉時代・南北朝時代の日本ではよく知られていて、『古今著聞集』や『曾我物語』にも記載があります。流水と菊花の紋様も、この時期から、さまざまな分野で用いられるようになりました。そのうちで最も有名なのが楠木氏の家紋といえるでしょう。

現代の神戸でも、北区の山田町や西区の押部谷町で、菊がさかんに栽培されています。そこでは、たくさんの露（菊水）がしたり落ちてくるに違いありません。

神戸の街には「菊水」がいっぱいあります。恩恵を受けて長生きしたいものです。（秋をへて蝶もなめるや 菊の露 芭蕉）

西神ニュータウン物語 大海一雄

(神戸新聞総合出版センター)

西神ニュータウンとは、三つの町(西神中央・西神南・学園都市)の総称。本書が出版されるまでは、まとまった資料がほとんど無かった。神戸市への編入前、この一帯は明石郡だったが、この地域の村史も作成されていないようだ。

二百万年前のアケボノゾウの化石が見つかり、かつて播磨の国であったこの地域に、いつどのようにしてニュータウンが構想され、成立していったのか、詳細な歴史が記されている。

「住み、働き、学び、憩う」をキャッチフレーズにした、全国初の職住近接ニュータウンの特徴や町名の由来など、西神ニュータウンを知る教科書として最適である。



画集『神戸百景』—川西英が愛した

風景 川西英 シーズ・プランニング、シーズペース編(シーズ・プランニング)

神戸市兵庫区に生まれ育った木版画家・川西英。死後四十三年を経た昨年、画集『神戸百景』(一九六二年刊)が復刻された。

神戸にゆかりのある著名人に、作品一景ごとに随想を書いてもらうという稀有の体裁は再現されなかったが、二十二センチ四方というコンパクトさはファンならずとも魅力的である。巻末収録の、ご子息川西祐三郎氏ほか関係者の寄稿も興味深い。

おいしい水 原田マハ(岩波書店)

舞台は神戸。一九八〇年代初め頃だろうか。元町の雑貨店でアルバイトをしている十九歳の主人公は、近くの喫茶店でいつも見かける美しい青年に恋をする。あふれてくる涙を抑えられない若さと、八〇年代の輝くような神戸がとけ合い魅力を放つ。「格別おいしいコーヒー」の店が何度も登場するので甘い香りが漂ってくるようだ。ちなみに、コーヒー一杯分の時間で読めるくらい短い作品である。

須磨離宮物語—千年の時空を超えて

(神戸市立須磨離宮公園)

須磨離宮公園の場所には、かつて皇室の別荘「武庫離宮」があった。それが戦後神戸市に下賜されて、公園として昭和四十二年に開園された。

園内には潮見台・月見台という絶景の地がある。須磨の月は源氏物語にも記され、後世にも月の名所として知られている。

園内の各所に多くの句碑があるほか、灯籠や巧みな石垣・配石があり、造形美が目を引き付ける。

また梅・薔薇・菖蒲・紅葉が移り変って盛りとなり、四季異なった彩りが楽しめる。敷地東側の植物園には鑑賞温室もある。

須磨離宮公園の魅力ある自然や歴史・文化を多彩な写真で美しく紹介している。

神戸モダンイズム探訪—近代化遺産

神戸市教育委員会編(神戸市体育協会)

神戸港が開港したのは、一八六八(慶応三)年のこと。以後、神戸は、港を窓口として、外国文化を取り入れながらモダンでエキゾチックな近代都市へと変わってゆく。その発展の証を、神戸が描かれた風景画や旧外国人居留地の建物、外国人墓地を通して紹介する。残された遺産は、保存だけでなく、活用することも大切だ。この冊子を手に神戸の近代化遺産を訪ねてみるのも楽しい。

ラン×ラン神戸 神戸新聞総合出版センター編集・発行

神戸のランナーやランニング初心者に、市内ランのすべてを紹介した本書。神戸で開催されるロードレース大会やお勧めコースをはじめ、スポーツショップやクラブ、ひいては走り方のいろはまで、盛りだくさんの内容だ。

「達成感」「健康維持」といった、ランニングの魅力について語るランナー達の笑顔を見ていると、春の気配にも誘われ、走ってみたくなる。



静かに迫り来るHIV—神戸からの報告 エイズ予防サポートネット神戸編(エピック)

エイズ予防サポートネット神戸は、二〇〇五年、エイズ国際会議の神戸開催を契機に設立され、事務局は神戸市保健所内にある。市民、事業者、医療・教育関係者と行政が連携をとり、ボランティア団体への支援・助成を行ってきた。本書には、その活動状況や世界のエイズ対応の変遷が書かれている。神戸市では、近年は年間二十数人のHIV感染症の新規報告があり、全国と同様に増加傾向にある。「エイズは本当に防ぎにくい病気です」。この言葉は、NGOが保健所と作成したリーフレットの呼びかけである。予防啓発だけでなく、HIV陽性者支援と感染リスクにさらされている人たちの人権重視が、感染拡大防止につながることを本書は述べている。



星の降る町—六甲山の奇跡 明川哲也(メディアファクトリー)

万引きをした僕と追って来た老菓子職人のサジは、六甲山麓の廃墟の給水塔の上に取り残されてしまう。流星の夜、「人は何か一つを得、代わりに何か一つを失う」と語るサジ。それらの話に耳を傾ける僕。そうして…。

自分の居場所を模索する少年と戦争や多くの裏切りに絶望した老人が、生きる希望を見つける一夜の物語。二人の気持ちの変化に、心が温まる。

建築家安藤忠雄 安藤忠雄(新潮社)

安藤忠雄といえば、世界的に知られた建築家の一人であり、この本は彼の初の自伝である。

安藤忠雄と神戸との関りは深く、代表作の一つである「六甲の集合住宅」や北野の商業ビル建設のエピソードからは、建築や空間に対するこだわりが読み取れる。

独学で建築家になった彼は大変な苦勞をしたが、妥協を許さないチャレンジ精神には胸のすく思いさえする。建築に興味のない方もぜひ一読をおすすめしたい。

|| その他の新刊 ||

私たち、「何じん」ですか?—「中国残留孤児」たちはいま… 樋口岳大、宗景正(高文研)
原付バイク・スケッチの旅—還暦からの楽しみ 日本全国2万キロ紀行 石井義啓(友月書房)

洋菓子店の経営学—「神戸スウィーツ」に学ぶ地場産業育成の戦略 森元伸枝(プレジデント社)
自分道—自分をつらぬき歴史を作った女たち 玉岡かおる(角川SSコミュニケーションズ)
阪神大震災・聴覚障害を持つ主婦の体験 紫陽花まき(文芸社)

書庫探訪 その⑰ 『ペデスツリヤン』

『ペデスツリヤン』は、大正2年(1913)10月に創刊された「神戸徒歩会」(Kobe Walking Society)の機関誌です。

明治43年(1910)創立の登山団体「神戸草鞋会」から改称された「神戸徒歩会」は、登山活動をはじめ、登山道の新設や改修、登山地図の発行なども行っていました。『ペデスツリヤン』の発行を一時休止し、その費用を登山道の整備費にあてたこともあったそうです。会員には外国人も含まれ、機関誌には英文ページもありました。図書館の所蔵は、大正2年(1913)の第2号から昭和12年(1937)の204号までですが、残念ながら欠けている号が多い状態です。

昭和10年(1935)には「25周年記念号」が発行され、それまでの活動記録がまとめられています。



昭和4年(1929) 会員に配布された地図

谷崎潤一郎 梅の谷の家

岡本の里は住みよしあしや潟

海を見つとも年を経にけり

昭和三年、四十二歳の谷崎潤一郎は梅の谷（現東灘区岡本）に転居し、敷地内に自ら設計した一棟を新築しました。辺りには梅の木が多く、海が望める高台でした。「私は以前から移転好きで（中略）一つ土地にまる二年と居たことはないのに、それが岡本ではすっかり癖が止んでしまった。（中略）もう永久に帰る気はない」（『岡本にて』・冒頭の歌も）と書き、この地域への愛着を示しています。

東京生まれの谷崎が関西へ移ってきたのは、大正十二年の関東大震災がきっかけでした。以降、京都や大阪にも住みましたが、阪神間の穏やかな気候を好み、本山や魚崎周辺を中心に転々と居を移します。梅の谷の家は阪神間では五軒目に当たり、昭和六年までここで暮らしました。谷崎が趣向を凝らしたこの家は、

和風と洋風、中国風の折衷という、個性的なつくりでした。東京での馴染みの中華料理店・借楽園から出入りの大工を呼び寄せて建て、室内には中国旅行で買い求めた調度品を備え付けました。中国風の細かな棧のはまった硝子扉が印象的な建物だったようです。そして、庭には十株ほどの梅の木がありました。当時『蓼食う虫』の関西方言を手伝った高木（旧姓江田）治江は、かつてこの家が農家のものだった頃のまま残された木だと回想しています。



旧梅の谷の家 西側

この家で暮らした時期、谷崎には様々な転機が訪れました。私生活上では、約十五年連れ添った千代夫と離婚します。かつて谷崎はこの夫人との結婚を後悔し、彼女に思いを寄せる佐藤春夫に譲ろうとしたものの、実現間際に気を翻したため、佐藤とは長らく絶交状態になりました（小田原事件）。その後佐藤と和解が成立し、事件か

ら十年を経た昭和五年、佐藤と千代との三者連名で知人や関係者に宛て、次のように通知しました。「我等三人此度合議を以て千代は潤一郎と離別致し春夫と結婚致す事と相成」。この件は新聞記事に取り上げられるなど社会的反響は大きく、谷崎の身辺を騒がせます。

昭和三年から四年にかけて書かれた『蓼食う虫』の作品世界は、彼らが現実には置かれた状況を連想させます。主人公・要の妻である美佐子には阿曾という恋人がいます（千代にも佐藤とは別に恋人がいました）。要には美佐子への夫としての愛情はなく、二人の関係を容認しています。

夫婦は離婚を決断し、息子を含めた家族にとつての最善の時機を見計らっているところですが、一家が住むのは豊中ですが、自宅の様子は岡本の家を模したもので、現実同様、以前農家の庭だった時からあったという梅や、豊中からは遠くにあるはずの海の方角を意識して空を見上げる登場人物の姿などが描かれています。

『蓼食う虫』は、谷崎の作品中で、「古典回帰の時代」への転換点となつていきます。それまでのものが現代的で西歐的とされる一方、以降の

作品では、関西で谷崎が触れた上方の伝統文化や風習への傾倒が色濃く表れ始めます。

谷崎は本来、関西、とりわけ大阪に敵しい目を向けていました。大正十四年の『阪神見聞録』で大阪の間を酷評し、「あまり上等ではない」としています。しかし、昭和七年の『私が見た大阪及び大阪人』では、批判一方ではなく上方のよきにも触れており、その魅力に徐々に引き込まれつつある様が窺えます。

この変化には、後に夫人となる根津松子の存在が指摘されています。

千代夫人と離婚した翌年、谷崎は古川丁未子と結婚しますが、心内には昭和二年に知り合った松子の姿を既に長く秘めています。この岡本の家には松子を招き、舞の会や、梅見の会などを催したそうです。

その後、丁未子と別れた谷崎が、松子とともに倚松庵に暮らし、上方の雅やかな情緒に彩られた『細雪』を執筆するに至る、約十年前の話です。

参考図書

- 『谷崎潤一郎の阪神時代』市居義彬
- 『仮面の谷崎潤一郎』大谷晃一 ほか